

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	統括部局：教務機構	担当部局：教務機構
大項目	6 教育内容・方法・成果 (研究科) 《全学的な視点》	
中項目	6.4 成果	
小項目	6.4.1 教育目標に沿った成果が上がっているか。	
要素	学生の学習成果を測定するための評価指標の開発とその適用 学生の自己評価、卒業後の評価(就職先の評価、卒業生評価)	
小項目	6.4.2 学位授与(卒業・修了判定)は適切に行われているか。	
要素	学位授与基準、学位授与手続きの適切性 学位審査および修了認定の客観性・厳格性を確保する方策(院)(専門)	

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
 B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
 C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
 D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 学位審査の流れを学生に明示し、透明性・客観性を確保する。	→学位論文の取得要件の明示(論文数、筆頭著書の有無等)、リポジトリ等での学位論文の公開、学外審査委員の登用	C	C	B	B	A
2. 学生に研究進捗状況を自己管理させる。	→研究の進捗状況に応じた中間発表の実施	B	B	A	A	A
3. 長期的な視点で大学院満期退学、修了後の進路把握を行う。	→進路状況調査	B	B	B	A	A

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2009年度以降、数年間かけて、大学院教務教務学生委員会や大学院FD部会において検討を依頼してきた結果、2013年度には13研究科にて学位論文審査基準設定を完了し、ほとんどの研究科で公表を行った。学位取得プロセスについても同様に、作成のうえ公表し、学生の履修心得にも明示した。学位論文の公表は、大学としては博士論文に限り、2007年度のリポジトリ開設以降公表に取り組んできたが、2013年4月より博士論文のリポジトリでの公表が義務化された(本学独自の取り組みは、特許、個人情報保護に関わるもの、学会誌投稿等で非公表を申し出ない限り、原則として公表)。学外審査委員については、審査分野等の必要性に応じて、研究科により加えている。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 学位取得プロセス、学位論文審査基準とも整備され、研究科、学生双方が手続き等を共有することが可能となり、公明性の担保につながった。博士論文のリポジトリでの公表は文科省よりも先に取り組んでいた。学外審査委員は必須となっていないため、数件の審査で事例が一部研究科であるのみ。予算との関係がある	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 学外審査委員は、現在は必須としていない。推進するかを検討する。その他は特になし。	☆
		その他	☆

目標2	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 博士論文提出までに、博士論文計画書の提出・審査、年度末の年次報告書提出や研究成果発表、年度内の研究科内ワークショップでの研究報告、博士論文概要の提出、博士論文中間報告書の提出、予備論文の提出などのいずれかもしくは複数 を各研究科にて採り入れている。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 博士論文提出までのステップとその時期について学生、教員の双方に明示することにより、論文執筆スケジュールやその進捗状況の把握が可能となり、標準修業年限内の学位取得への意識づけにも繋がっている。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 各ステップが形骸化しないよう、実質的、効果的な運用を行っているか各研究科にて検証する必要がある。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標3	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 修了後の進路状況調査については、前期課程修了者および後期課程修了者(博士学位取得者および満期退学者)に対して、各研究科とキャリアセンターが協力し、ほぼ全員把握してきた。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 大学院修了者の進路を把握により、キャリアセンターは大学院生用ガイダンスなどの内容を見直す、実施内容を改善すること ができた。この情報は企業説明実施をお願いする企業の選択の際の参考情報としても活用されている。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 今後さらにキャリアセンターとの協力体制を整備・確立し、経年変化を追っていく。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
備考			☆